一里

更埴教育会長　　吉池光則

勤務校の近くに一里山という地籍がある。善光寺街道の里程を表す塚があった場所である。その場所には文化年間（1804～）に建立の芭蕉句碑があったが、近代明治期の道路整備に伴って治田公園へと移設されている。

子どもたちも公園の桜を見る散歩がてらに、移設されたこの碑の前を歩いてはいるものの、石に刻まれた文字に興味を示す様子は見えない。

「何に此の師走の市にゆくからす」

私たちをからすに比定するわけではないが、世界がパンデミックに陥っているこんな時に・・・

私たちは何を求めて、どこに向かおうとしているのであろうか。

学級を開いたばかりで、先行きの話し合いも行われていないこともあって、栽培物未定の学級園に薺（なずな）が可憐に、勢いよく咲いている。雑草一括扱いにせず、なずなだと拘るのは、30 代半ばになずなを意識するようになったからである。当時所属していた郡市教育会の配布資料に掲載されていた随想、松尾芭蕉の「よく見れば」にかかわる一文が、今も心に残っている。句は「・・・薺花咲く垣根かな」と続く。

当時、自分の授業づくりに疑念も持たず、研究授業といえば、なんとなく授業を見ていた自分が、３０代半ば、研究主任を任されたことも重なって、「よく見れば」何かが見えたり、わかるようになったりするかもしれないと思ったというのが、その句が心に留まったという理由と言える。貞享 3 年、または 4 年の春、芭蕉 43、4 歳頃の発句ということなので、 ものの見方や考え方に大きな進展があった頃の、代表的な作品とされている。しかし厳しい批評家は「よく見なければ見えない」ようではまだまだ芭蕉は未熟とも評している。

歳 40 代半ばでの教職における自分はどうだったのだろうか。未だに未熟であれば、当時の未熟は未熟も未熟。

よく見なければ見えないどころか、大切なものは見えないという言葉すらある。数ミクロンというサイズの、肉眼では決して見えない感染症の元となるウィルスと共存している今、先が見えないという今だからこそ、何事もなかったかのように地に咲くなずなを見つめてそのあり方に圧倒され、空を行くからすに照らして自らを顧みている。子どもの見ているものが見えているか。観る、診る、視る、看る・・・みる目を養わなくてはなるまい。

貞亨５年（１６８８年）８月１１日、芭蕉は名古屋を出発して「更科紀行」の旅に出る。先人の跡を訪ねたといってもいい。平安末期にこの地を訪ねた西行の足跡である。8 月 15 日、更級の地に立ち、月を観た。

「おもかげや姨ひとりなく月の友」

翌日、善光寺を参拝し、埴科坂城を経て江戸に戻った。

更埴教育会には、更級と埴科のＤＮＡが息づいている。先人が探求し訪ね来たこの地で、子どもの成長を促進する教育の世界に身を置く私たちは、世界的なパンデミックの渦中にあっても、問題に向き合い、課題を解決すべく「研究・修養」を、一里、一里と積み重ね、謙虚に、貪欲に学び続けなければならない。　　＜令和 3 年 5 月　会報第 180 号巻頭言＞